

解答

觸鬚 しまりに (歌う) のが聞こえるので、木之助は目をあけると、じぶんは (さるの腰かけ) のような大きな (きのこ) の上に腰をかけ、前には (じいさん) がおおぜい (手) をついて (おじぎ) をしていた。木之助は (ふしぎ) に思い「ここはなんというところ、おまえたちはなにものだ？」とたずねると (じいさん) の中でも一ばん (大きい) のが「こは (きのこ山) の山おくの (きのこ谷) で、わたしどもはきのこの (精) です。」と名のつた。木之助は「むかしから (きのこ山) には恐ろしい (魔物) がすんで人間を (とり殺す) と聞いていたが、 (魔物) とはおまえたちのことだな。おれは (木好き) の木之助だ。木をたいせつにしてきた恩人の木之助に (あだ) をしようとはなんのことだ。 (心待ちがい) のきのこめら。」としかりつ

「いえ、 (大事) のご恩人の (木之助) さまを、どうしてとり殺しましょう。わたくしどもはあなたさまに (お願ひ) があって、お迎ひ申しました。」

「この (地) の下には、地震の主の (大なまず) が住んでおり、 (大地) を震動させ (立ち木) をゆりたおし、大きな (口) で木や草の (根) を食うので、山の草木はだんだん (枯れて) しまいます。わたくしどもきのこは草木には深い (えん) があるので (大なまず) のいたずらをつっちゃっておけません、わたくしどもの (か弱い) 体では (大なまず) には向かえません。木好きのあなたさまによく (おたのみ) 申したら、 (草木) の加勢をしてくださるだろうと、 (雨) までふらせ、お迎ひ申したのです。」

罫圖穴 (きのこの精) がていねいにたのんだので、 (木之助) はふに落ち、それをひき受けた。
(大なまず) は地の (下) にいると聞いて (木之助) はこまったと思っ

たが、きのこの精が (先) に立つので、どこへ行くかと思うと、いままでじぶんの (腰かけ) (いた) 大木 (のまわりを) (四) (へんまわって、幹のところを) (三) つばかりたいたたら、その (根元) に大きな (ほらあな) があいた。
(中) をのぞくと、 (下) はもう (まくら) で、 (底) の深さもわからない。 (石) を投げこんでもその (止まった) 音は聞こえず、冷たいくさい (風) が吹き上げるばかり。けれども気丈な (木之助) だから (恐ろしい) とは思わない。

「 (飛びこむ) わけにもいから、 (はじ) でもあるか」と木之助がたずねると、きのこの精は (ふじつる) で編んだ長い (なわ) を出したので、木之助はそれを (大木) の (根) にゆわいつけ、下へおりていった。
おりればおるほど、 (暗さ) は (暗し) (寒さ) は (寒し) 、それにあなが (せまく) なってくるので、 (岩) (しり) をぶつつけたり、 (砂) を (頭) からかぶったりする。